

## ブラジルのストリートチルドレン その現状と解決に向けてコミュニティ教育が持つ可能性

外国語学部ポルトガル語学科 3 年 荒牧咲貴

近年の BRICs の一員として注目され、今や GDP は世界第 13 位の経済大国とされるブラジルだが、いまだに植民地時代から築かれてきた貧富の格差が色濃く残っている。所得格差で言えば、世界で 2 番目に不平等な国であり、高額所得住民の 20% が全体の所得の約 7 割を占めているのに対して、低所得住民の 40% が得る所得は 1 割に満たない。実際、ブラジルは全国民を十分に養えるくらい裕福であるにもかかわらず、平等な所得分配がなされていないため、今も貧困は広がり続けているのである。

さらに、ブラジルに蔓延する貧困の一番の犠牲者は子供達である。彼らの多くは貧しいために十分に食べることもできず、学校にも行けず、幼いころから家族を助けるために日々働いている。また中には、様々な理由から家族と一緒に暮らすこともできず、常に危険と隣りあわせの路上で生活している子供達も数多く存在するのである。今現在ブラジルでは 3 万 5000 人もの子供達が路上で生活をしていると言われている。彼らの大部分は子供らしい生活を送ることもなく、危険な路上生活の中で生き抜くために麻薬や犯罪に手を染め、その短い人生を終えていくことさえある。著者はそんな彼らの状況を知った時、どうすれば彼らがこんな悲惨な路上生活から抜け出せるかと考えた。

そうして、何よりも重要なのはこの問題の根底にある貧困をなくすための政策であるが、それだけでなく、子供達自身が自らの力で貧困から抜け出すための教育政策も必要なのではないかと考えるようになった。なぜなら、教育が子供達に与える影響は大きく、貧困から抜け出すためにも、抜け出した後自立した生活を送るためにも重要な役割を果たすのである。しかしながら、ブラジル政府が行う教育政策は不十分であり、教育が必要な全ての子供達にその恩恵が与えられているわけではない。その上、ブラジルの公教育の質は決して良いとは言えず、教材などに費用もかかることから、親達は子供を学校へ行かせるよりも働かせた方が良くと考えてしまっている。また、学校で教育を受けたからといって必ずしも貧困から抜け出せるわけではないという格差から生じる教育の二重構造という厳しい現実もある。

そこで、無料で行くことができ、公教育で教えるような読み書きではなく子供達の生活に密着した授業を行うコミュニティ教育に焦点を当ててみたい。ここで行われる教育は、子供達の自立を促し、自分達を取り巻く問題を批判的に捉え、解決していこうとする意識を養うことを目的としている。本稿では、北部パラ州の州都ベレン市を拠点としてストリートチルドレンに対するこうした教育を行っている「エマウス共和国運動」という NGO 団体を紹介することで、コミュニティ教育を通して、子供達が路上生活から抜け出すためにどのような教育が必要なのかを考えていきたい。